

2章 維持及び向上すべき歴史的風致

「歴史的風致」とは、歴史まちづくり法第1条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。

名古屋市内には、長い歴史の中で人々が積み上げ継承してきたさまざまな歴史的風致が存在している。その中で、名古屋市の歴史的骨格を形作っている要素を中心に「維持向上すべき歴史的風致」を以下の6項目にまとめた。

- 1 尾張氏ゆかりの地、志段味に見られる歴史的風致
- 2 熱田神宮周辺に見られる歴史的風致
- 3 近世名古屋城下町に見られる歴史的風致
- 4 近世街道沿いなどの城下町周辺地域に見られる歴史的風致
- 5 近代産業の発展に見られる歴史的風致
- 6 戦災復興以降に見られる歴史的風致

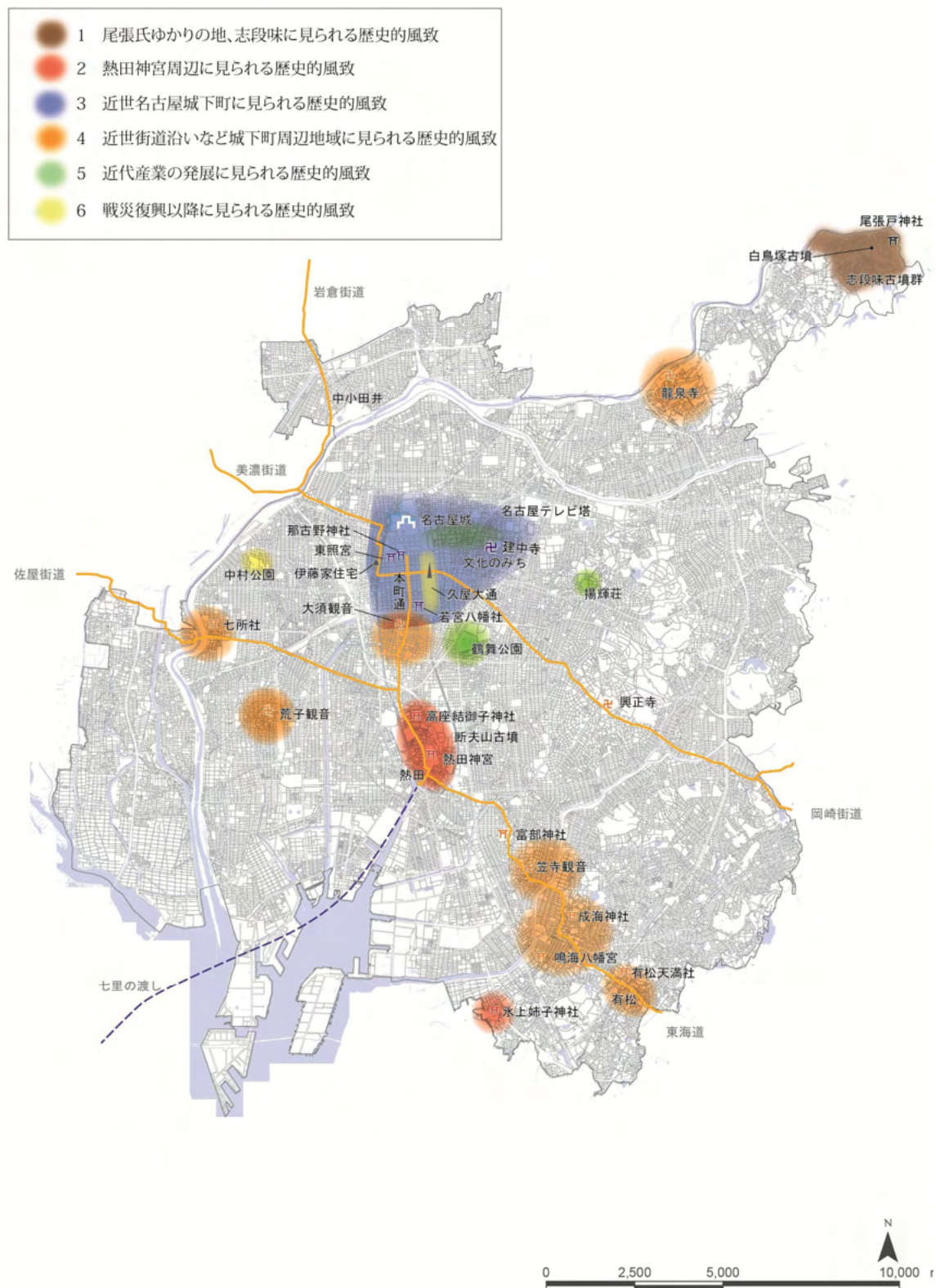


図 2-1-1 名古屋市の維持向上すべき歴史的風致 位置図

1 尾張氏ゆかりの地、志段味^{しだみ}に見られる歴史的風致

1-1 はじめに

志段味地区は、名古屋市の東北端に位置し、庄内川の左岸に開けた河岸段丘上に市内では数少ない農村的景観を残した地域のひとつである。名古屋市内最高地である東谷山^{とうごく}（標高 198.3m）から続く丘陵地には、灌漑用のため池が多く築かれ、古くから農業を中心とした生活が営まれてきた。

志段味地区は、白鳥塚古墳（1-ア）など多くの古墳が現存していることで知られている。上志段味では尾張戸神社古墳・尾張戸神社（1-イ）、勝手塚古墳・勝手社（1-ウ）のように、古墳の上に氏神が置かれ、尾張戸神社祇園祭（1-あ）、勝手社提灯祭（1-い）、オタチマチ（1-う）などの祭礼行事が行われるなど人々の祈り・文化の中心地となるとともに、近代以降は地元住民も古墳の調査に携わるなど、志段味の人々は古墳と密接に関わりながら生活してきた。これらの古墳は、古代の尾張を統一した尾張氏へとつながる勢力が築いたものと考えられている。尾張氏ゆかりの地であり、名古屋のルーツともいえる志段味の地では、今も古墳を背景に伝統的な行事が営まれている。

1-2 志段味地区の歴史的建造物

3 世紀中頃、近畿一円を掌握した大和王権は、前方後円墳を統制の証とするかのように巨大な墳墓を造営し始める。その勢力に従属した地方の豪族層も、こぞって前方後円墳の築造を開始し、地域の首長としての地位を誇示した。4 世紀前半には尾張で最古の部類に属する前方後円墳、白鳥塚古墳^{しらとりづか}が庄内川の喉元に忽然と姿を現す。庄内川の河岸段丘面に位置する大久手池周辺には、5 世紀中頃の志段味大塚古墳などの帆立貝式前方後円墳 5 基が次々と造られた。これらの古墳からは、多種多様な埴輪のほか、甲冑、馬具、武器、鏡などが出土しており、畿内の最先端の墓制と文物が、5 世紀の中頃までにこの地にもたらされていたことがわかる。



写真 2-1-1 上志段味大久手池池畔より東谷山を望む

6世紀半ばから8世紀前半には、東谷山山麓とその周辺には、約50基の群集墳が築かれた。この時期の代表的な古墳としては、東谷山白鳥古墳があり、横穴式石室が完全な形で残り開口するものとしては、名古屋市内唯一の古墳である。



現在では、東谷山頂・山麓、庄内川の段丘面に位置するすべての古墳を総称して「志段味古墳群」と呼称している

図 2-1-2 志段味地区の古墳分布状況

一方、名古屋の台地部にも次々と大型の前方後円墳が造られ、5世紀末～6世紀初頭には、伊勢湾を望む熱田台地の西縁熱田区旗屋町に、この地方を翼下に収めたことを誇示するかのような東海地方最大の前方後円墳、断夫山古墳（史跡、全長150m）が誕生する。この古墳こそが、大和王権と強力な関係を築き上げた尾張国造の記念碑的な首長墓である。

名古屋の地が、クニとしての体裁をととのえたのは、断夫山古墳の登場によるといってもよい。それまで名古屋近辺に散在していた尾張のさまざまな勢力は、大和王権に積極的に近づいて行くが、そうした勢力の中から尾張の支配権を握る「尾張氏」が誕生し、5世紀の末頃までには尾張一円の統一をほぼ終え、大和王権の支配下に組み込まれていった。さらに尾張氏は、尾張連草香の女である目子媛を継体天皇に嫁がせ、安閑・宣化両天皇の外戚となつてからは、一躍、

有力な内廷関係氏族となって、東国の一大勢力「尾張国造」として力を持つようになった。こうした尾張氏成立過程の一端は、東濃の山塊から流れ出た庄内川が、尾張の沃野^{よくや}を望む、名古屋市市の北東、守山区上志段味東谷山西麓^{みさか}の地に築造されたさまざまな古墳の造営過程から垣間見ることができる。

1ーア 白鳥塚古墳

上志段味の地は、東谷山西麓から庄内川左岸にかけて広がる沖積平野を押える喉元の地であるとともに、庄内川の谷を遡り、恵那山麓を経て神坂峠^{みさか}で東山道と合流し、伊那・信濃さらには坂東から奥州へと向かう東国ルート^{みさか}の要衝の地である。この扇の要の地に、4世紀前半、名古屋市内で最も古い前方後円墳・白鳥塚古墳が築造された。白鳥塚古墳は、墳丘長 115m と同時期の尾張では最大の前方後円墳である。墳丘の形態などは、畿内地域の大王墓との共通性が強く、志段味地域だけでなく尾張南部を支配した首長の墓と考えられている。「白鳥塚」という名称は、古墳が白色の石英で葺かれていたことに由来するともいわれ、熱田社との関わりが強い白鳥伝説との関連も推察される。



写真 2-1-2 白鳥塚古墳（史跡）

1ーイ 尾張戸神社古墳・尾張戸神社

現在、志段味地区には白鳥塚古墳とほぼ同時期に東谷山山頂に築かれた尾張戸神社古墳（円墳）が残っている。この古墳からも石英が出土しており、古い時期の様相を示している。

4世紀後半には、東谷山山頂から南に伸びる稜線上に中社古墳^{なかやしろ}（前方後円墳）・南社古墳^{みなみやしろ}（円墳）が築かれた。それぞれの古墳の上には、尾張戸神社の末社である中社（祭神は菊理姫命^{くくり ひめのみこと}）・南社（同 伊邪那岐命^{いざな ぎのみこと}）が祀られている。これらの古墳と神社の存在は、名古屋市内最高峰の東谷山が古くから聖なる地として認識されていたことを物語っている。



写真 2-1-3 発掘された中社古墳の埴輪列

尾張戸神社古墳の墳頂には、尾張氏の祖神を祀る尾張戸神社が立地している。

尾張戸神社は、断夫山古墳の被葬者とされる宮簀媛^{みやすひめのみこと}命^{（注）}が、東谷山頂に尾張氏の始祖乎止与^{おとよのみこと}命^{たけいのだねのみこと}の子建稻種^{たけいなねのみこと}命を祀るために創建したと言う伝承をもつ神社である。天火明^{あめのほあかりのみこと}命・建稻種^{たけいなねのみこと}命・天香語^{あめのかごやまのみこと}山

命という尾張氏の祖先3神を祀り、「延喜式神名帳」に載る「山田郡尾張戸神社」とされる。創建の時期は定かではないが、社伝によれば、大永元年（1521）、火災により焼失し、寛文5年（1665）、尾張二代藩主光友によって復興修理されたとされる山田郡の古社で、「尾張戸天神」という別称もある。



写真 2-1-4 尾張戸神社本殿

江戸時代後期の地誌『尾張名所図会』（天保15年(1844)）には、東谷山と尾張戸神社について、「尾張戸の神の鎮まります山なので、古くは「尾張山」といわれていたが、「^{とうごくやま}當国山」と呼び替えられた。尾張の国名（當国＝尾張）を表す由緒ある地名であったが、のちには転じて東谷山とも書き表される様になった云々」などと記されている。地名の由来からも、「東谷山」は尾張にとって重要な場所であったことが窺える。

本殿

明治17年（1884）の「郷社尾張戸神社本殿改造願」により、従来の八幡造から現在の神明造に新築されたことが判明する。昭和8年（1933）、伊奈森太郎は「墳丘の上に新殿が建ち、前の平坦な処に拝殿があり、前庭がある」（伊奈森太郎・山村敏行『郷土資料をあさりて』（昭和8年（1933））と、当時の様子を記している。また、尾張戸神社には、寛文5年（1665）から昭和9年（1934）に至る本殿の改築等を記録した棟札が多数残されている。境内には、元禄6年（1693）や享保元年(1716)の刻銘のある灯籠なども見られる。（⇒1-あ 尾張戸神社祇園祭）

注 熱田神宮の伝承では、断夫山古墳の被葬者は、宮簀媛命としている。一方、古代史と考古学の研究成果では5世紀末から6世紀初頭に活躍したとされる尾張連草香の墓にあてるとは妥当ではないかとされるが、今のところ確証はない。

1-ウ 勝手塚古墳（史跡）・勝手社

大久手池周辺の古墳群からやや離れた所には、6世紀前半に築かれた勝手塚古

墳がある。勝手塚古墳は、志段味地区で最後に築かれた帆立貝式古墳で、古墳の周りには馬蹄形の周濠が巡る。

古墳の上には、もうひとつのムラの氏神である勝手社(祭神は忍穗耳尊、天王社・秋葉社も合社)が存在する。

寛文 11 年 (1671) の『寛文村々覚書』には、勝手社・山神社・八剣社が記されており、寛政 4 年 (1792) の『上志段味村絵図』によると、八剣社は字川原、山神社は字上島にあつて、八剣社が氏神になっていた。しかし明治 42 年 (1909)、八剣社は、字中屋敷の勝手社に合祀され、このときより氏神も八剣社から勝手社に変更された。

本殿

本殿は一間社流造となっており、本殿のほか、明治 42 年 (1909) に合祀された八剣社・山神社や、秋葉社、天王社などが祀られている。



写真 2-1-5 勝手社本殿

石造物

勝手社境内には石造物も多く、文政 6 年 (1823) 建立とされる常夜灯、明治 24 年 (1891) 建立とされる御嶽社・覚明霊神碑、明治 38 年 (1905) 建立の刻銘のある 廿二夜^{にじゅう}供養塔などがある。(⇒ 1-い 勝手社提灯祭、1-う オタチマチ)



写真 2-1-6 廿二夜供養塔



写真 2-1-7 常夜灯

1－3 志段味地区における伝統的営み

1－あ 尾張戸神社祇園祭

尾張戸神社の神事に関して、大正14年(1925)の『郷社式内尾張戸神社昇格調書』には、元旦の元旦祭から始まり、年占祭、御国祝祭（御^{おくわ}^に^の^{うま}^に^いなめ^め祭）、二ノ午祭、祈年祭、除疫祭、大祓祭、祇園初祭、祇園祭、例祭、新嘗祭、寒夜祭の祭礼が記録されている。

今も、元旦祭、10月の例祭のほか、旧暦6月31日（新暦の7月15日前後の日曜日）に、子供の息災を祈願する茅の輪くぐりの神事（祇園祭）などの伝統行事が行われ、上志段味と東谷山東麓に広がる瀬戸市水野地区の人々の鎮守として崇敬されている。

茅の輪くぐり（祇園祭）は、祭礼当日、拝殿内での神事に引き続いて、午後3時から輪くぐりが行われる。（⇒1－イ 尾張戸神社古墳・尾張戸神社）宮司を先頭に参拝者が列をつくり、順番に輪をくぐる。輪くぐりは3回行われる。1回目の輪くぐりを終えた宮司は、左回りで元の場所に戻り、参拝者もそれに従う。2回目は右回りで戻り、最後の輪くぐりに臨む。輪くぐりを終えた参拝者は、あらかじめ用意された茅の束を受け取り、それらを持ち帰る様子がみられる。参拝者は持ち帰った茅で小さな輪を作り、疫病除けとして家に飾る。

この祭礼からも解るように、尾張戸神社は、地域の氏神、鎮守として今も機能しているのである。



写真 2-1-8 茅の輪くぐり神事



写真 2-1-9 茅の輪くぐりに参加する人々

1-1 勝手社提灯祭（提灯山と納涼盆踊り）

勝手社（⇒1-ウ 勝手塚古墳・勝手社）の最もにぎわう祭りは、8月新盆の入りの日近辺に行われる提灯祭りである。提灯祭りは、『志段味地区民俗調査報告書』（昭和60年（1985））によると、明治末年には行われていたとされる。提灯祭りは戦時中までは、旧7月17日（秋葉サンの縁日という）に久岑寺^{きゅうしんじ}境内で、旧7月22日（廿二夜様）に勝手社境内で行われていたが、昭和30年頃から、勝手社のみとなった。108灯の瓜提灯を取り付けた提灯山が境内に立てられ、盆踊りが繰り広げられる。祭りの日には、上志段味地区に盆踊りの音色が響き、各町内から会場へ向かう浴衣を着た人々も見られ、この地域の祭りとして長く続いてきた様子が感じられる。提灯山の山建て作業は昔ながらの方法で人力により行われ、提灯の火は、今も蠟燭とするなど、伝統を守っている。



写真 2-1-10 提灯祭

1-ウ オタチマチ（二十二夜様）

上志段味では、『志段味地区民俗調査報告書』（昭和60年（1985））によると月待ち信仰のひとつである「オタチマチ」という願かけの行事を行ってきた。かつては旧7月22日を「廿二夜様」と呼んで、氏子たちが「廿二夜供養塔」の前に集まり、日が落ちてから立ったままで月の昇るのを待つというものであった。現在は月齢にとらわれず、月遅れの8月22日に供養塔にお供えをして地域住民がお参りをするという形で行われている。（⇒1-ウ 勝手塚古墳・勝手社）



図 2-1-3 上志段味地区の古墳群、建造物および祭礼等

1-4 まとめ

上志段味の地には、白鳥塚古墳をはじめとする多くの古墳が存在し、古墳上に建立された尾張戸神社や勝手社では、茅の輪くぐりや提灯祭りといった地域の人々による伝統的な祭りが執り行われている。これらの古墳や神社、人々の営みは、単に上志段味地区の歴史を今に伝えるだけでなく、名古屋のルーツともいえる尾張氏の出自や、上志段味から熱田へとつながる古代社会の実像を探るうえでも重要な手掛かりになるとともに、上志段味の人々が育んできた生活や祈りの文化に触れる機会を与えてくれる貴重な歴史的風致である。



図 2-1-4 尾張氏ゆかりの地、志段味に見られる歴史的風致